

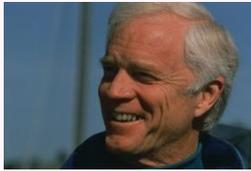
【地球交響曲第一番 出演者】



野澤重雄 (植物学者・日本)
 「トマトは心を持っている。私は、そのトマトの心にたすね、トマトに教わりながら、成長の手助けをただけなんです。」たった一粒のごく普通のトマトの種から、バ イブノゾー -も特殊肥料も一切使わず、一万三千個も実のなるトマトの巨木を作ってしまった野澤重雄さんはそう語る。この映画では、トマトの種植えから一万三千個も実をならす巨木に成長するまでの過程を克明に記録しながら、野澤重雄さんのトマト生命哲学を聞く。



ダフニー・シェルドリック
 (動物保護活動家・ケニア)
 ダフニーはアフリカのケニアで、象牙密猟者のために親を殺された象の赤ちゃんを育て、野生に還す活動を続けている。11歳は、30年前、ダフニーに初めて育てられ、野生に還って行った双の象で、ダフニーが3歳まで育てた孤児達を預かり、野生で生きる知恵を教えながら一人前に成長するまで養母の役割を果たす。このダフニーと11歳の連携ムービーによって、今まで10数頭の孤児達が無事に野生に還って行った。ダフニーと11歳の感動的な再会のシーンを中心に象の社会から人間社会へのメッセージをダフニーが伝える。



ラッセル・シュワイクアート (元宇宙飛行士・アメリカ)
 アポロ09号の乗組員だったシュワイクアートは、月着陸船のテストを兼ねて宇宙遊泳中に、ある不思議な体験をした。その体験は彼の人生観を大きく変えてしまった。「ここにいるのは私でなく、眼下に広がる地球のすべての生命、そして地球そのものも含めた我々なんだ」アメリカの超エリートだった宇宙飛行士が科学技術の最先端で理解した生命感を語る。



ラインホルト・メスナー (登山家・イタリア)

頂上への最後のアタックを開始するときの到来を、メスナーはいつもその「少女」との対話の中で続ける。酸素ボンベも無線機も持たず、たった一人で登るメスナーにとって、その幻の少女だけが、唯一の、真のパートナーだ。ラインホルト・メスナーは世界で唯一人、単独で世界の8,000メートル級の山全てを登り尽くしたアルピニストの王者。そのメスナーが臨死体験や人間の生命力の限界について語る。



エンヤ
 (ソングライター・アイルランド)
鶴岡真弓
 (ケルト美術研究者・日本)

神話と妖精とケルト遺跡の島、アイルランド。そのアイルランドから聞こえてくるエンヤの歌声は、我々の魂の奥底に眠っていた遠い記憶を呼び覚ます。古代ケルト民族の血を色濃くひくエンヤのその神秘的な歌声には、古代ケルト民族の宇宙観が宿っている。エンヤの歌声は、我々を異界の海へと誘う幻の小舟。水先案内人はケルト美術研究家の鶴岡真弓。エンヤの生まれ故郷、アイルランド北端の小さな村グレイブを出発点に、アイルランドの自然とケルト遺跡をねる。

【地球交響曲第九番 出演者】



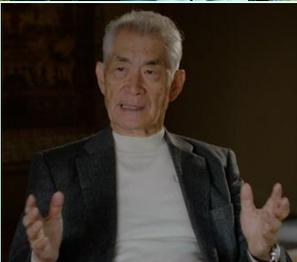
小林研一郎/指揮者

「21世紀の今、ベートーヴェンの『第九』を振ってバロックを超える指揮者はいないという音楽関係者の声をよく聴く。奇しくも私、龍村と同年同月生まれ。私と小林研一郎が出会うということは偶然ではない。はっきり言って言葉では説明のできない同じ事柄がお互いにあり、地球交響曲的な何か、人間にとって大切なこと、今の時代にやらなくてはならないこしがあるのだと確信している。バロックの仕事映画にするとかそういうことではない。この時代までの私と彼とがつながり合って生まれる「第九」を、私のいのちの最後として送りたいのだ。



スティーブン・ミズン/認知考古学者

最近のめざましい考古学の新発見によって、初智識人たちは私たちと同程度の大きな脳と発達した喉を持ち、「言葉」ではないが、「歌声」によって互いに高度なコミュニケーションをしていたのではないかという学説が生まれてきた。この学説を提唱したのが、認知考古学者のスティーブン・ミズンである。彼は、人類の心の始まりを知る鍵は、初智識人たちの心を知ることだと語る。映画では、かねてより縄文文化の自然観、生命観に興味を持っていた彼とともに、アイヌや琉球の文化に触れながら、音によって紡がれた世界に触れる旅をする。遠い祖先とのつながり、見えない存在とのつながりを思い出す旅は私たちに何を思い出させてくれるのだろうか。



本庶祐/医学博士・分子生物学者・ノーベル生理学医学賞受賞者

「地球交響曲」の構想に大きな勇気を与えてくれた「多様なものが多様なままに共に生きる、それはいのちの摂理である」と語ってくれたのは、本庶祐である。40年前、当時すでに抗体の遺伝子研究で難病解明に大きく貢献し、世界的な評価を得ていた。すべての生命はひとつながりのものであり、ともに調和しながら永遠に生きている。宇宙誕生の一瞬に生まれた粒子のひとつさえ、宇宙の無数の星々の誕生と関わりながらいま、この私の身体の中にあるかも知れない。その記憶を呼び覚ますとき、蘇ってくる懐かしさはどこに繋がっているのか。遺伝子を見つめることで生まれた新たな生命像は人間の心のありようにも変化をもたらすのか。いのちとはなにか。その永遠の問いを科学の眼から語ってくれる。

【午後の部/演奏者】

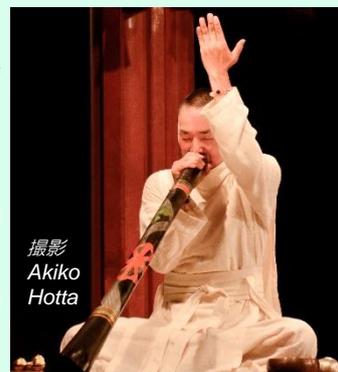


雲龍プロフィール

横笛をはじめ縦笛、土笛、磐笛、アガリウの笛、息吹之笛など様々な笛を心に感じるままに演奏を行い、神社・仏閣に内外の聖地、全国各地に活動を広げ、細野晴臣with環太平洋MUSICのメンバーでもあり、龍村仁監督映画「地球交響曲第六番」虚空の音の章にも出演。2012年より「陶笛・息吹之笛」の創作活動を始め、各地で「息吹之笛の集い」を行い、一つ一つの響きの世界を伝えている。

KNOBプロフィール

13歳から芸能界で活動後、25歳の時にオーストラリアにて先住民アボリジニの人々の伝統楽器で世界最古と云われている自然が作り出した木「ディギッドゥ(Didgeridoo)」に出会う。2007年公開のドキュメンタリー映画「地球交響曲第六番」虚空の音の章に出演。様々なアーティストとのコンサート活動と共に、長年、国内外の神社、仏閣、教会、聖地での献奏活動を行なっている。



撮影 Akiko Hotta